平安京右京二条三坊十五町

―花園春日町の調査―

２０１６年

古代文化調査会

例　言

1．本書は、古代文化調査会が京都市右京区花園春日町において、株式会社デュランによるマンション建設に伴い実施した平安京右京二条三坊十五町跡（15H248）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、株式会社デュランより委託を受けた古代文化調査会の水谷明子が担当し、家崎孝治が補佐した。

3．調査にあたっては、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導を受けた。

4．本書の編集・執筆は水谷がおこなった。

5．図面及び遺物整理、製図トレースは水谷が、遺物実測は板谷桃代が担当した。

6．本書で使用した方位及び座標の数値は世界測地系（新測地系）平面直角座標系Ⅵによる。

7．本書で使用した地図は、京都市都市計画局発行の2,500分の１の地図（花園）、国土地理院発行の25,000分の１の地図（京都北部）を調整し、使用した。

8．土壌及び土器・瓦類の色調の表記は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。

9．遺構番号は実測図・写真ともに共通している。

10．発掘調査及び遺物整理に際して、下記の方々の御指導・御協力を得ることができた。記して感謝の意を表します。（所属・敬称略、五十音順）

赤松佳奈　家原圭太　上野道子　馬瀬智光　奥井智子　梶川敏夫　片山雅之　熊井亮介
熊谷舞子　黒須亜希子　佐々木勇祐　鈴木久史　西森正晃　新田和央　長谷川行孝
平尾政幸　堀　大輔　松尾承信　宮原健吾
(株)明輝建設　(株)大高建設　(公財)京都市埋蔵文化財研究所　大東建託(株)
(株)デュラン　文化財京都

本　文　目　次

平安京右京二条三坊十五町跡

Ⅰ　調査の経緯……1

Ⅱ　遺　　構……5

Ⅲ　遺　　物……14

Ⅳ　ま　と　め……21

図　版　目　次

図版１　遺跡　１　調査区遠景（北から）
　　２　調査区全景（北から）
図版２　遺跡　１　建物３（北東から）
　　２　建物１（北から）
図版３　遺跡　１　井戸142井戸枠掘形検出状況（北から）
　　２　井戸142土器出土状況（南から）
　　３　井戸142断割（北から）
　　４　井戸142曲物検出状況（北から）
　　５　井戸142完掘・旧曲物検出状況（南から）
図版４　遺跡　１　建物１　柱穴108（南から）
　　２　建物１　柱穴９断割（北から）
　　３　建物１　柱穴13断割（南から）
　　４　柵８　柱穴31断割（南から）
　　５　柱穴176土器出土状況（東から）
　　６　柱穴185土器出土状況（南から）
　　７　溝140・141（西から）
　　８　拡張区溝141断面（西から）
図版５　遺物　井戸142出土遺物
図版６　遺物　井戸142・柱穴170出土遺物

挿　図　目　次

図１　調査地点位置図……1
図２　調査地位置図……2
図３　平安京条坊と調査地位置図……2
図４　四行八門と調査位置関係図……2
図５　北・東・南壁断面実測図……4
図６　遺構実測図……6
図７　建物３実測図……7
図８　建物１実測図……7
図９　柵６実測図……9
図10　柵７実測図……9
図11　柵１実測図……9
図12　柵３実測図……9
図13　建物２実測図……10
図14　柵２実測図……10
図15　柵８実測図……10
図16　柵11実測図……10
図17　井戸142実測図……11
図18　溝140・141断面実測図……13
図19　柵４実測図……13
図20　柵９実測図……13
図21　柵10実測図……13
図22　柱穴176実測図……14
図23　柱穴185実測図……14
図24　建物３・１・柵１・建物２・溝141出土遺物実測図……15
図25　井戸142出土遺物実測図１……16
図26　井戸142出土遺物実測図２……17
図27　土壙151・柱穴176・185出土遺物実測図……20
図28　軒瓦拓影・実測図……20
図29　石製品実測図……20
図30　木製品実測図……20
図31　遺構変遷図……21

平安京右京二条三坊十五町跡

Ⅰ　調査の経緯

調査に至る経緯

調査地は京都市右京区花園春日町８番他である。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地・平安京右京二条三坊十五町にあたる。2015年８月、当地に株式会社デュランによるマンション建設の計画がなされ、工事に先立ち京都市文化財保護課が試掘調査を実施した。試掘調査の結果、地表下0.8mにおいて平安時代の遺構が良好な状態で遺存していることが判明し、発掘調査の必要性が考慮されるに至った。京都市の指導の下、当調査会と施主との協議の結果、当調査会が発掘調査をおこなうこととなった。調査は2015年11月より開始することとなった。

調査経過

調査地の平安京右京二条三坊十五町は、西側が木辻大路、東側が恵止利小路、北側が春日小路、南側が大炊御門大路に囲まれたところで、調査地は十五町の中央南端部にあたる東二行の北七～八門に相当する[注1]。この十五町は『拾芥抄』西京図によると十四町とともに月輪寺の所領となって

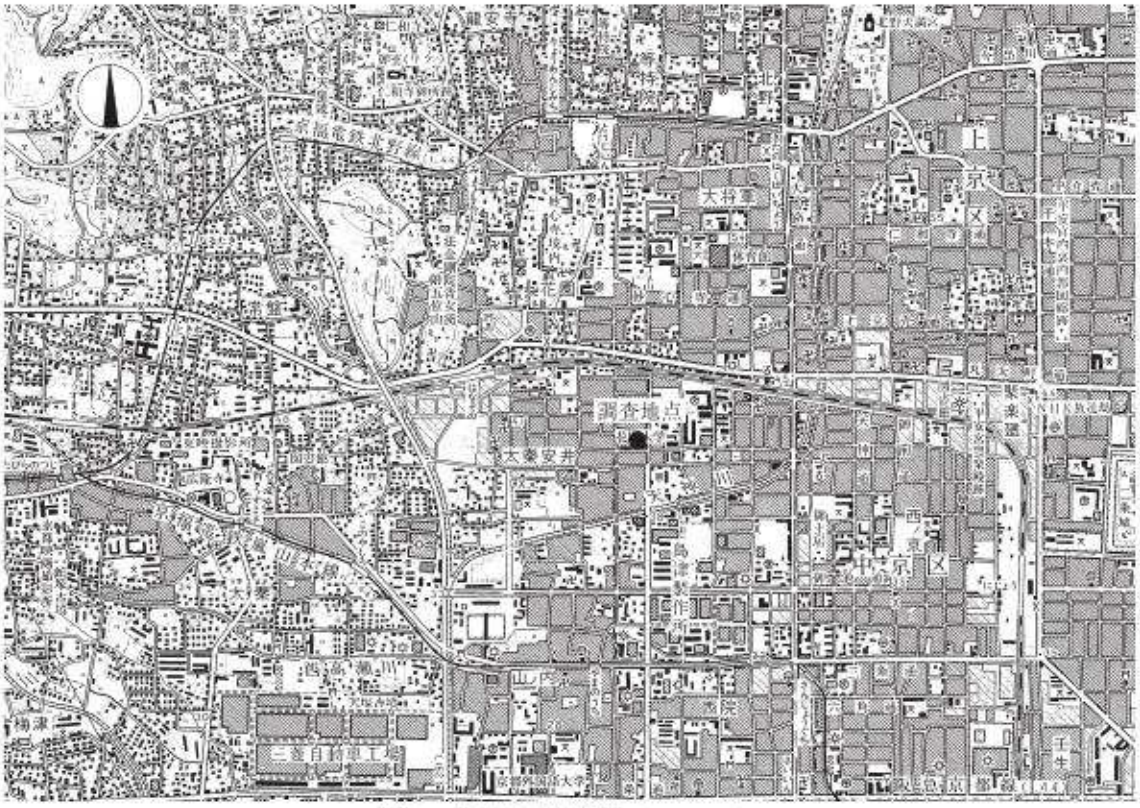


図１　調査地点位置図（1/25,000）

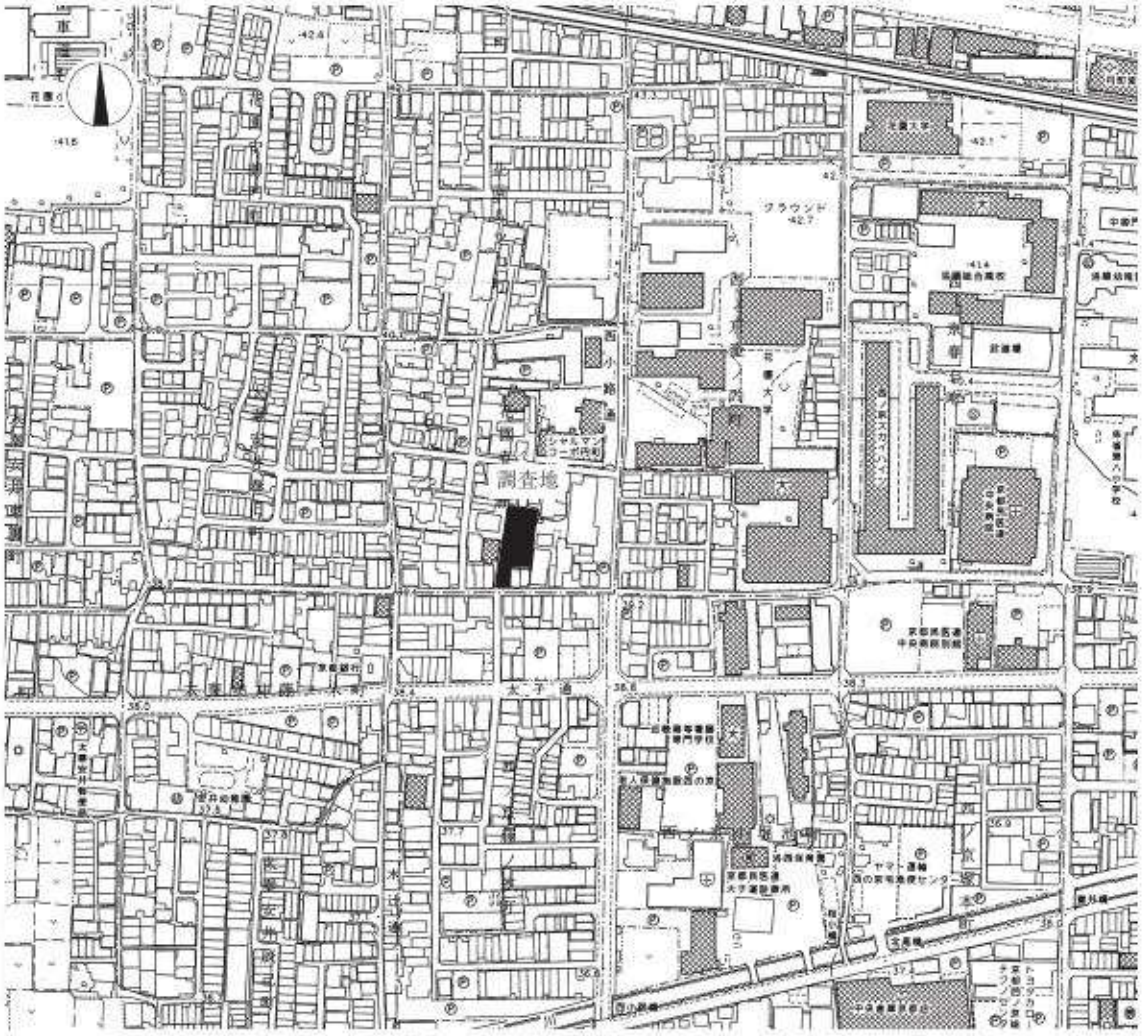


図２　調査地位置図（1/5,000）

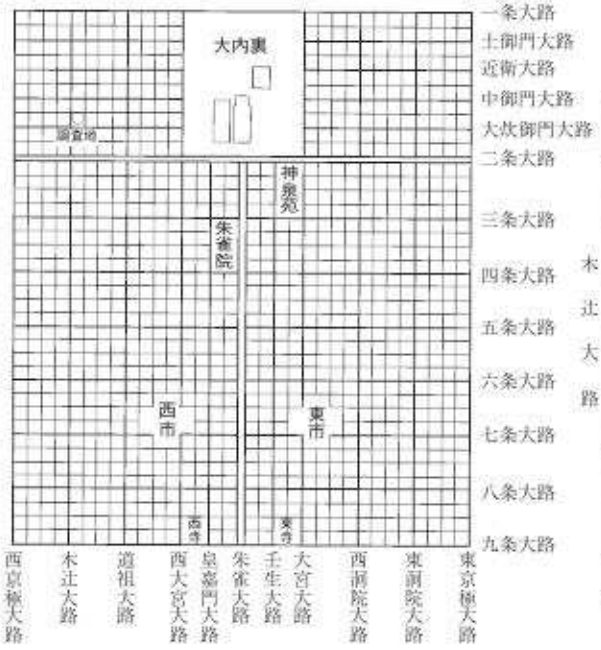


図３　平安京条坊と調査地位置図

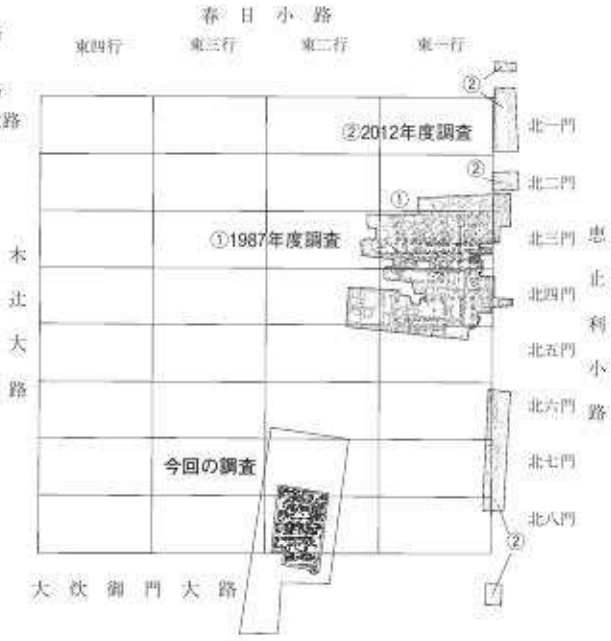


図４　四行八門と調査位置関係図（1/2,000）

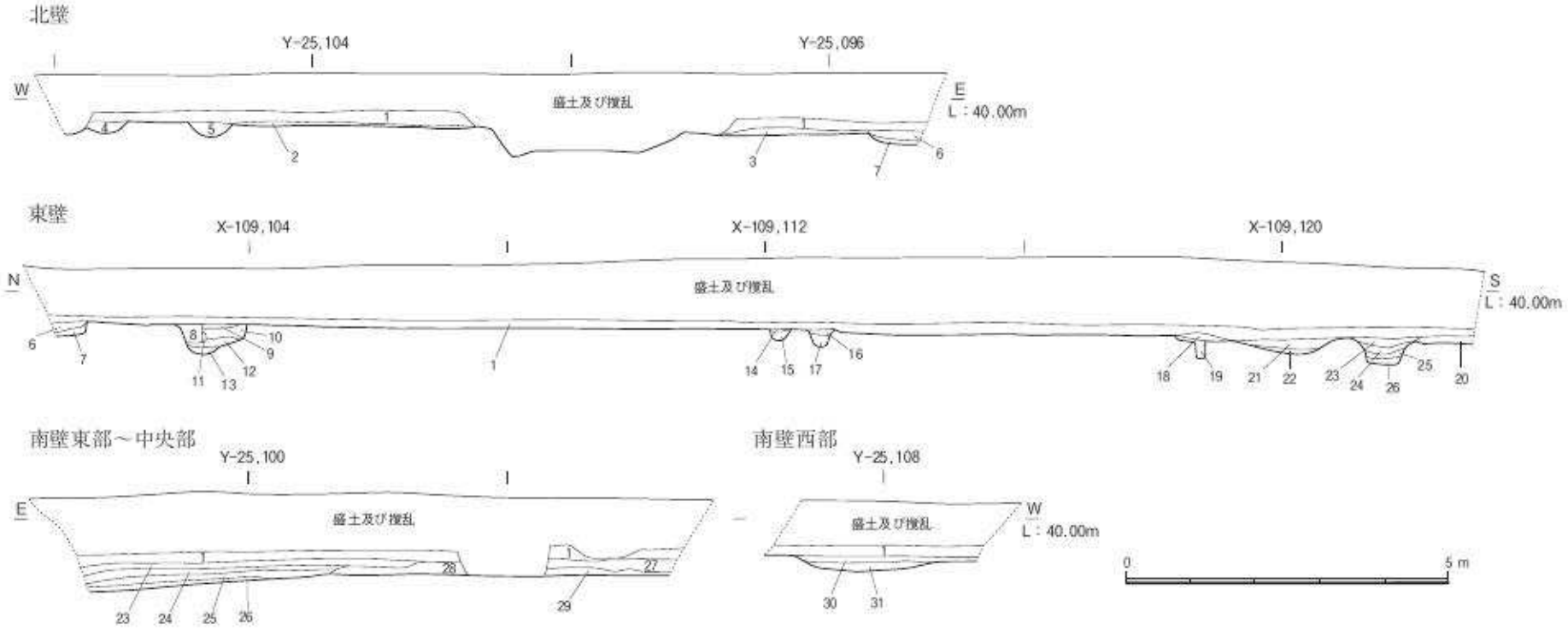
いる。月輪寺は京都西郊の愛宕山の南東中腹にあり、大宝４年（704）に修験道の僧である泰澄が開山し、天応元年（781）に光仁天皇の勅を奉じた慶俊が中興した。この時、地中から得た宝鏡の銘に「入天満月輪」とあったため、寺号に冠した。この月輪寺の本尊の阿弥陀如来像は平安時代中期のものといわれている。

本調査地の近隣調査（図２）としては、1986年に同じ十五町内でマンション建設に伴い発掘調査が、また2012年と2013年には西小路通の拡幅工事に伴い発掘調査[注2]が実施されている。1986年調査では、９世紀代から10世紀代半ばまでの３時期に区分できる建物群などを検出している。2012年、2013年調査では、９世紀代から10世紀代の井戸や柱穴と共に、恵止利小路の西側溝を検出している。

今回の調査においては、平安時代における宅地利用の変遷と、大炊御門大路の北側溝の検出を念頭に置き、試掘調査の結果を踏まえ、機械力により盛土・撹乱層を除去し、調査に着手した。調査は2015年11月２日から開始し、2015年12月25日に終了した。調査面積は301㎡で、実働日数は36日間であった。

調査の方法としては、（公財）京都市埋蔵文化財研究所が作成した平面直角座標系Ⅵによる平安京の復原モデル60を使用し、調査区の北東角を原点（X－109,101、Y－25,094.7）とする、東西方向にアラビア数字を、南北方向にアルファベットを記号として付し、４ｍメッシュのグリッドを基本とする遺構遺物の記録をとる方法をおこなった。十五町における築地四隅の座標値（新測地系）は次のとおりである。

北西	X＝-108,997.49m	北東	X＝-108,997.00m
	Y＝- 25,171.67m		Y＝- 25,052.28m
南西	X＝-109,116.87m	南東	X＝-109,116.39m
	Y＝- 25,171.18m		Y＝- 25,051.79m



1 10YR3/3暗褐色砂泥（φ1～5cm礫・炭混）（耕作土）
2 10YR4/4褐色砂泥（φ1～5cm礫多量混）
3 10YR3/2黒褐色砂泥
4 10YR3/3暗褐色砂泥（溝260）
5 10YR3/2黒褐色砂泥（柱穴279）
6 10YR3/4暗褐色砂泥 ｜ 土壙120
7 10YR2/3黒褐色砂泥 ｜ 土壙120
8 10YR3/2黒褐色砂泥（炭混）（柱穴295）
9 10YR2/3黒褐色シルト（炭少量混） ｜ 溝333
10 10YR3/3暗褐色砂泥（炭少量混） ｜ 溝333
11 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
12 10YR2/2黒褐色砂泥（炭少量混） ｜ 溝333
13 10YR3/4暗褐色砂泥 ｜ 溝333
14 7.5YR3/2黒褐色砂泥（炭少量混） ｜ 柱穴20
15 10YR2/3黒褐色砂泥（炭混） ｜ 柱穴20
16 7.5YR3/3暗褐色砂泥 ｜ 柱穴21
17 10YR3/3暗褐色砂泥（φ0.5～2cm礫中量混） ｜ 柱穴21
18 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥（φ0.5～2cm礫中量混） ｜ 柱穴26
19 10YR2/2黒褐色シルト（φ0.5～2cm礫中量・炭混） ｜ 柱穴26
20 10YR3/3暗褐色砂泥（φ0.5～2cm礫中量・炭混） ｜ 柱穴26
21 10YR2/2黒褐色砂泥（φ0.5～2cm礫中量・炭混） ｜ 溝140
22 10YR2/3黒褐色砂泥 ｜ 溝140
23 10YR3/2黒褐色砂泥（φ0.5～3cm礫極少量・炭混） ｜ 溝141
24 10YR3/2黒褐色砂泥（φ0.5～2cm礫少量混） ｜ 溝141
25 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥（φ0.5～5cm礫少量混） ｜ 溝141
26 10YR3/4暗褐色砂泥（φ0.5～2cm礫中量混） ｜ 溝141
27 10YR3/2黒褐色砂泥（φ0.5～5cm礫極少量・炭混） ｜ 溝140
28 10YR3/2黒褐色砂泥（φ0.5～5cm礫中量混） ｜ 溝140
29 10YR4/4褐色砂礫（φ0.5～5cm礫中量混） ｜ 溝140
30 10YR3/2黒褐色砂泥（φ0.5～5cm礫極少量・炭混） ｜ 土壙151
31 10YR3/4暗褐色砂泥（φ0.5～2cm礫少量・炭混） ｜ 土壙151

図5　北・東・南壁断面実測図（1/100）

Ⅱ 遺　　構

調査区遺構面は北から南にかけて緩やかな傾斜をもつ。調査北端部の遺構検出面は標高39.6m、調査南端部の遺構検出面は標高39.2mを測り、およそ0.4mの比高差がある。基本層序としては調査地全体に厚さ0.8～1.0mの現代盛土があり、その下に厚さ約0.2mの耕作土が堆積する。その直下でにぶい黄褐色シルトもしくは暗褐色砂礫混じりシルトの地山となり、この面で平安時代の遺構を検出した。

遺構は９世紀前半から10世紀後半のものがあり、遺構の種類としては掘立柱、井戸、土壙、溝跡などがある。また、風倒木と考えられる不定形の遺構も確認した。遺構総数は349基であった。以下、主要な遺構について述べる。

平安時代

建物３（図６・７・図版１の２・２の１）

調査区北西部に位置する。南北３間分検出したが、建物の西部及び北部が調査区外のため、全形は不明である。柱間は2.3mを測る。掘形は一辺0.6～0.7mの方形を呈し、深さ0.15～0.4m、柱根跡は径0.2mを測る。建物の軸線は座標北に対して東へわずかな振れをもつ。９世紀前半の土器が出土している。

建物１（図６・８・図版１の１・２の２）

調査区北半部に位置する。東西４間以上、南北２間、南面に廂の付く東西棟である。桁行9.3m以上、梁間4.6m、廂の出は2.3mの規模をもつ。桁行の柱間は７尺半（2.2～2.3m）から８尺（2.4m）、梁間の柱間は７尺半（2.3m）を測る。掘形は一辺0.4～0.6mの方形もしくは円形を呈し、深さ0.2～0.3m、柱根跡は径0.15～0.2mを測る。建物の軸線は座標北に対して東へわずかな振れをもつ。９世紀半ばの土器が出土している。

柵６（図６・９・図版１の２）

調査区中央部やや南寄りに位置する。東西方向の柵列である。長さ10.3mにわたって検出した。柱間は2.3～2.5mを測る。径0.4～0.6mの掘形をもち、深さ0.3～0.4m、柱根跡は径0.2mを測る。西端は延びる可能性がある。

柵７（図６・10・図版１の２）

調査区南部に位置する。井戸142に切られる東西方向の柵列である。長さ5.0mにわたって検出した。柱間は2.3mを測る。径0.4～0.5mの円形の掘形をもち、深さ0.2～0.4m、柱根跡は径0.15mを測る。東西両端は調査区外に延びる可能性がある。大炊御門大路の北築地推定ライン付近に位置する。

柵１（図６・11・図版１の２）

調査区中央部に位置する。建物１の南柱列と重複する、東西方向の柵列である。長さ10.0mに

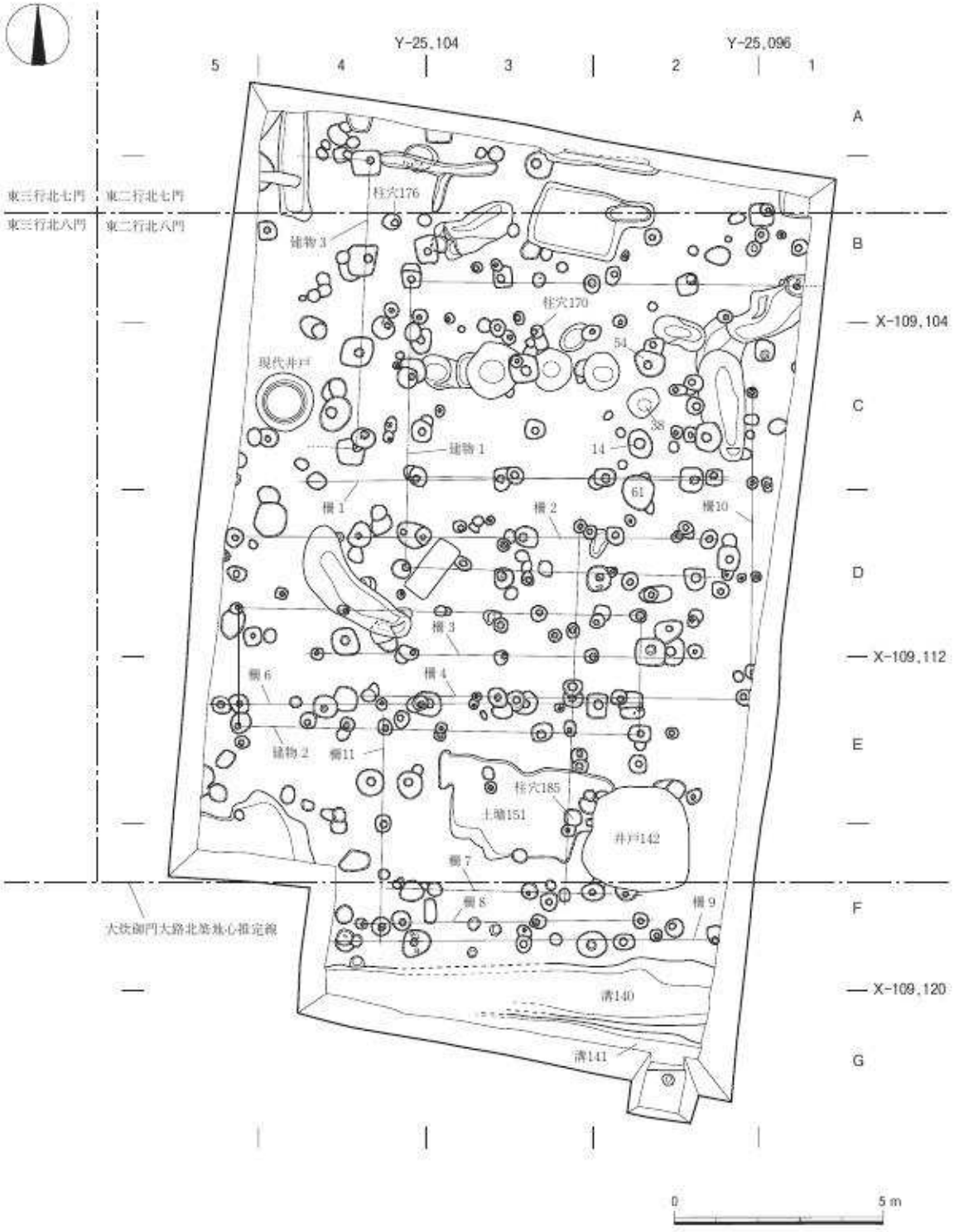


図6　遺構実測図（1/150）

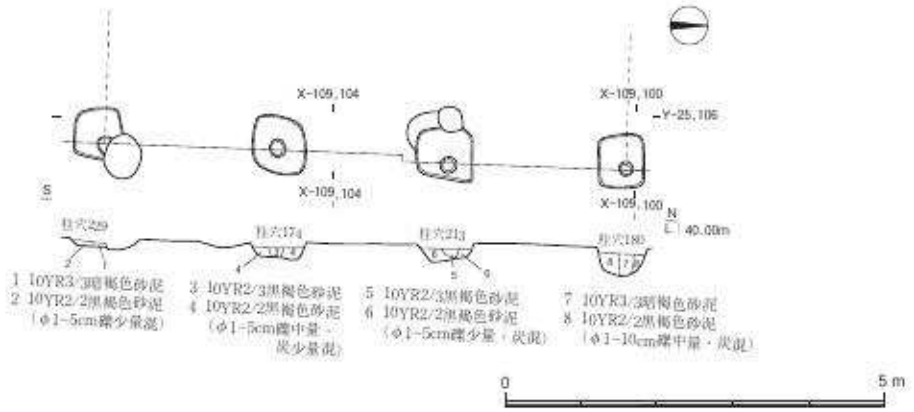


図７　建物３実測図（1/100）

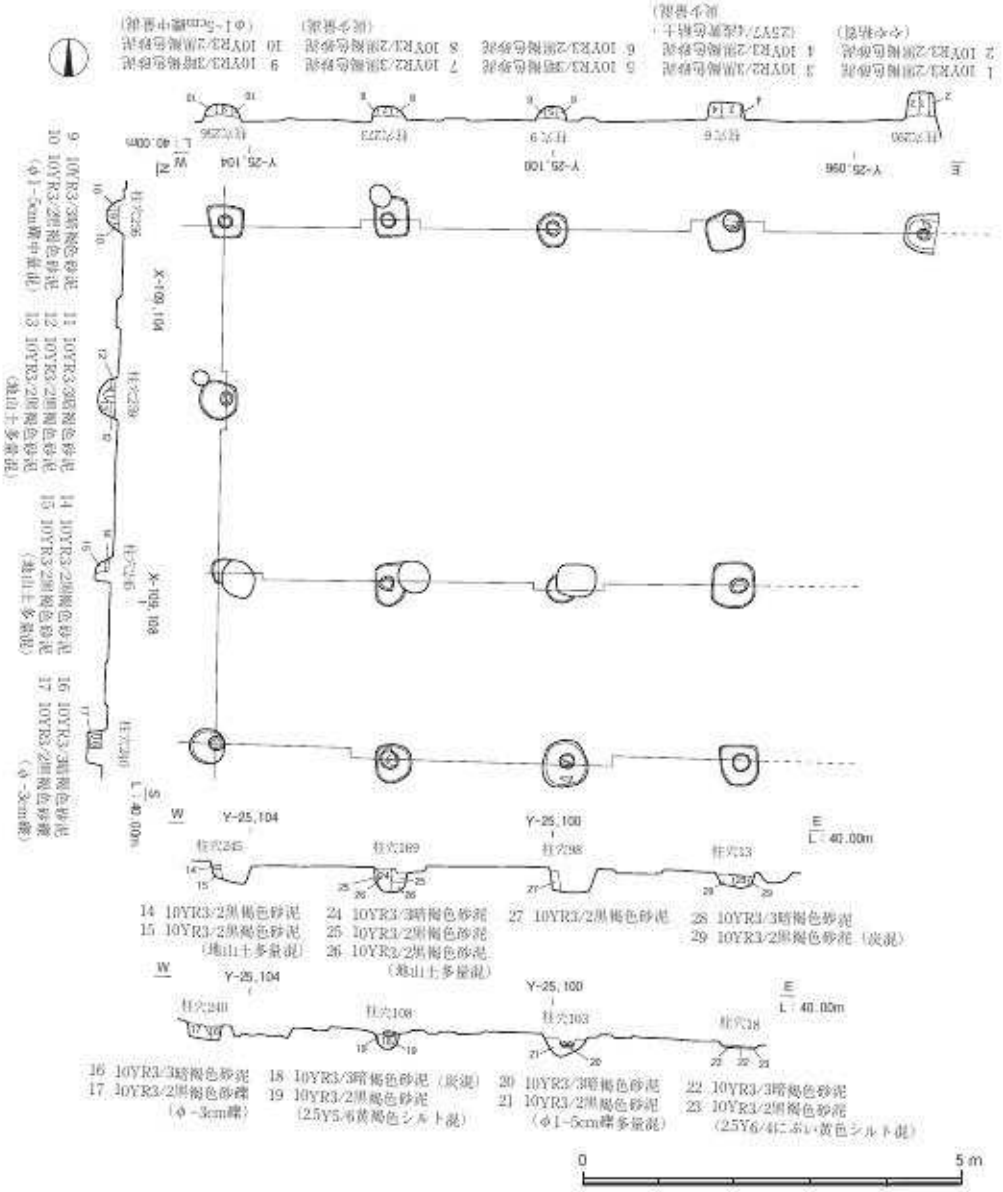


図８　建物１実測図（1/100）

わたって検出した。柱間は2.2～2.6mを測る。径0.4～0.5mの掘形をもち、深さ0.15～0.3m、柱根跡は径0.2mを測る。東西両端は調査区外に延びる可能性がある。９世紀半ばから後半の土器が出土している。

柵３（図６・12・図版１の２）

調査区中央部やや南寄りに位置する。東西方向の柵列である。長さ9.4mにわたって検出した。柱間は2.2～2.4mを測る。径0.3～0.5mの掘形をもち、深さ0.15～0.2m、柱根跡は径0.1～0.15mを測る。東端は延びる可能性がある。

建物２（図６・13・図版１の２）

調査区中央部やや南寄りに位置する。東西４間、南北１間の東西棟である。桁行9.6m、梁間2.8mの規模をもつ。桁行の柱間は７尺半（2.3m）から８尺半（2.6m）、梁間の柱間は９尺半（2.8m）を測る。掘形は一辺0.25～0.5mの方形もしくは円形を呈し、深さ0.1～0.3m、柱根跡は径0.15～0.2mを測る。建物の軸線は座標北に対してほぼ等しい。９世紀後半から10世紀前半の土器が出土している。

柵２（図６・14・図版１の２）

調査区中央部に位置する。建物２の北側に位置する。東西方向の柵列である。長さ11.8mにわたって検出した。柱間は2.2～2.4mを測る。径0.4～0.5mの掘形をもち、深さ0.1～0.15m、柱根跡は径0.15～0.2mを測る。東西両端は調査区外に延びる可能性がある。

柵８（図６・15・図版１の２）

調査区南部に位置する。東西方向の柵列である。長さ7.0mにわたって検出した。柱間は0.9～2.4mを測る。径0.3～0.5mの掘形をもち、深さ0.1～0.35m、柱根跡は径0.15～0.2mを測る。西端は延びる可能性がある。大炊御門大路の北築地推定ラインにほぼ平行で、柵７のつくり替えと考える。柱間に統一性は欠けるが、築地塀であった可能性が指摘できる。

柵11（図６・16・図版１の２）

調査区南西部に位置する。南北方向の柵列である。長さ5.2mにわたって検出した。柱間は2.4mを測る。径0.45mの掘形をもち、深さ0.2～0.4m、柱根跡は径0.2mを測る。

溝140・141（図６・18・図版１の２・４の７・４の８）

調査区南壁沿いに位置する。東西方向の溝で大炊御門大路の北側溝にあたる。溝140は幅1.2～1.4m、深さ0.1～0.4mを測る。堆積土は２層に分層でき、上から第１層が２cm以下の礫を含む黒褐色砂泥層、第2層が黒褐色砂泥層である。溝の東西両端は調査区外に延びる。10世紀前半から半ば頃の土器片や緑釉陶器片が出土している。溝141は幅0.9m、深さ0.1～0.4mを測る。溝の東西両端は調査区外に延びる。堆積土は４層に分層でき、上から第１層が３cm以下の礫を極少量含む黒褐色砂泥層、第２層が２cm以下の礫を含む黒褐色砂泥層、第３層が５cm以下の礫を含むにぶい黄褐色砂泥層、第４層が２cm以下の礫を含む暗褐色砂泥層である。溝の東西両端は調査区外に延びる。越州窯の青磁が出土している。溝140は少なくとも９世紀前半頃には成立しており、その後10世紀前半頃に溝141につくり替えられたと考えられる。

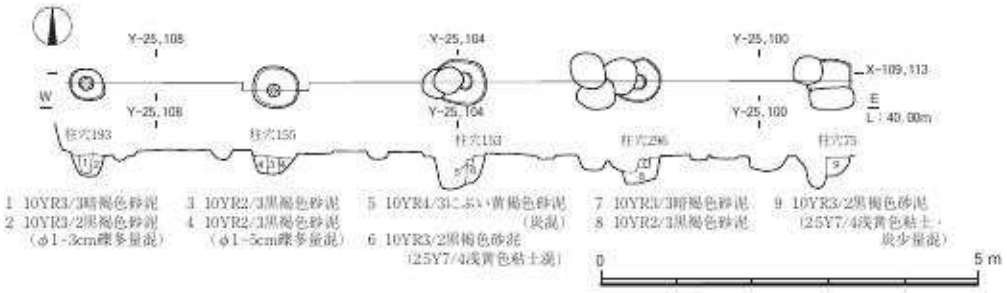


図9　柵6実測図（1/100）

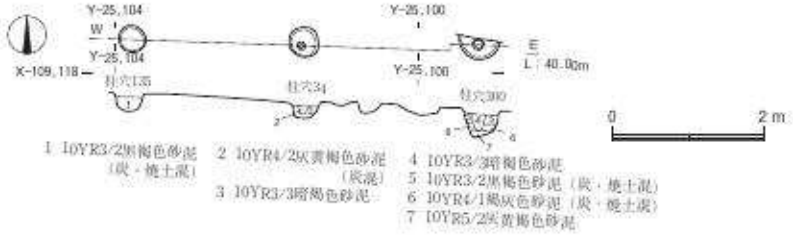


図10　柵7実測図（1/100）

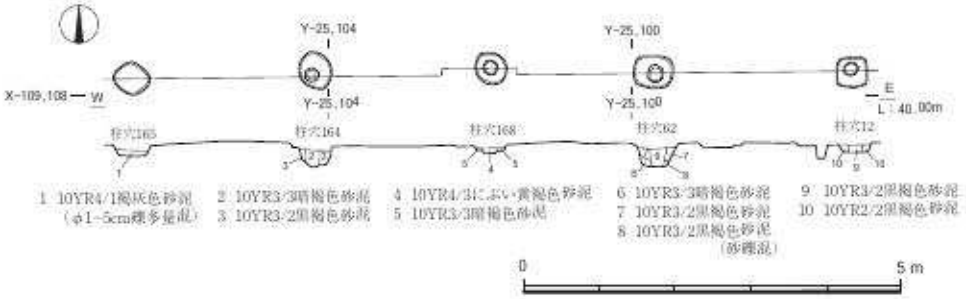


図11　柵1実測図（1/100）

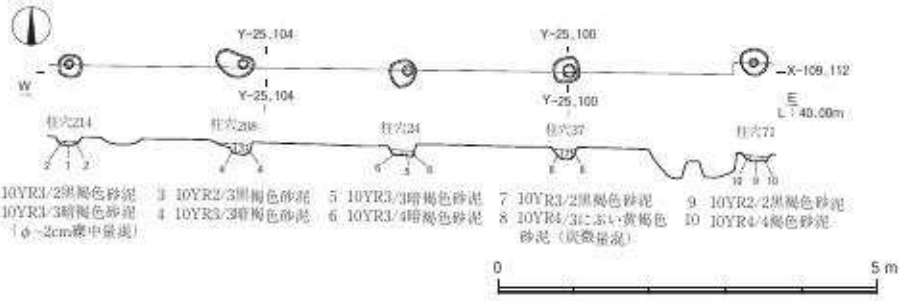


図12　柵3実測図（1/100）

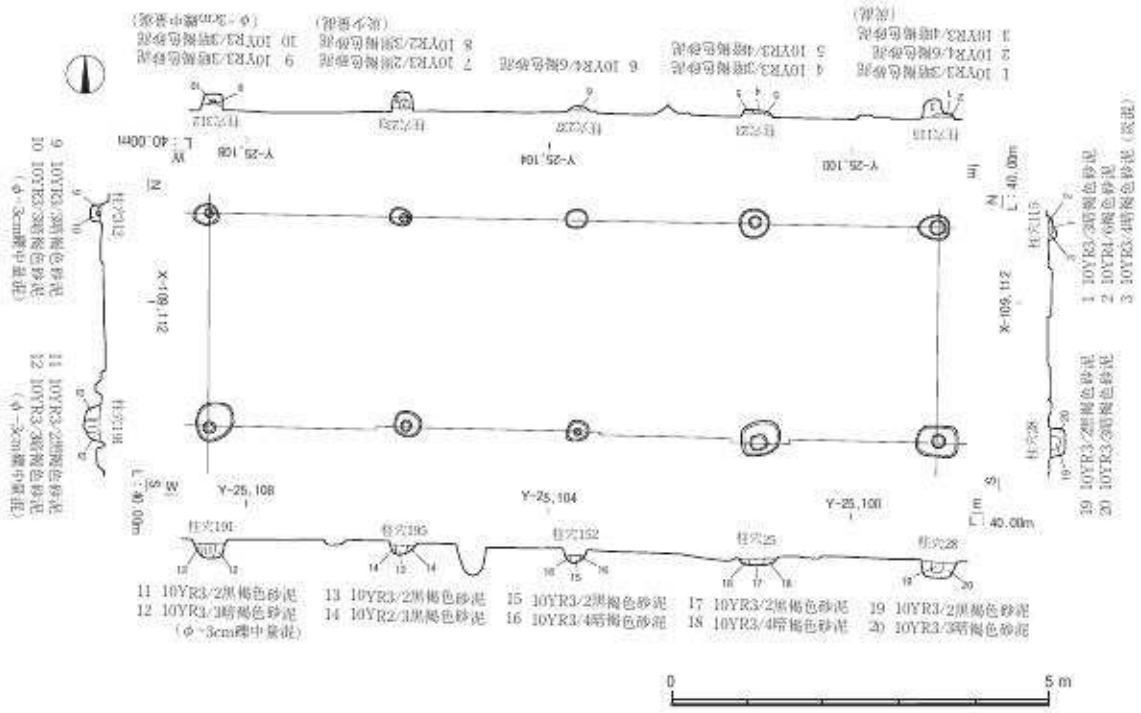


図13　建物２実測図（1/100）

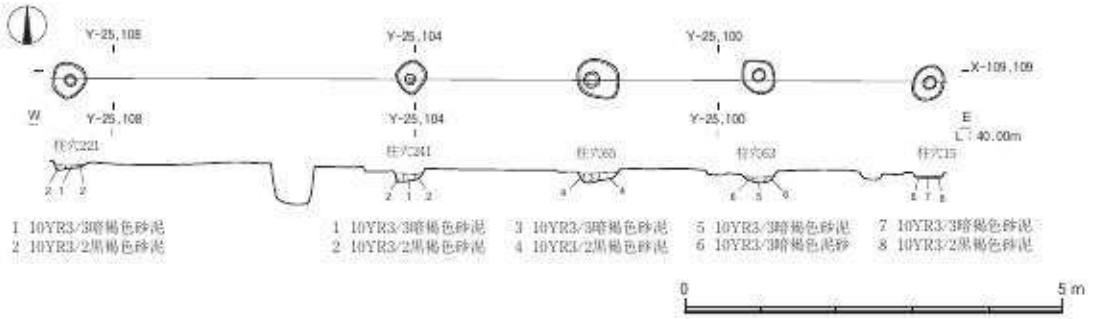


図14　柵２実測図（1/100）

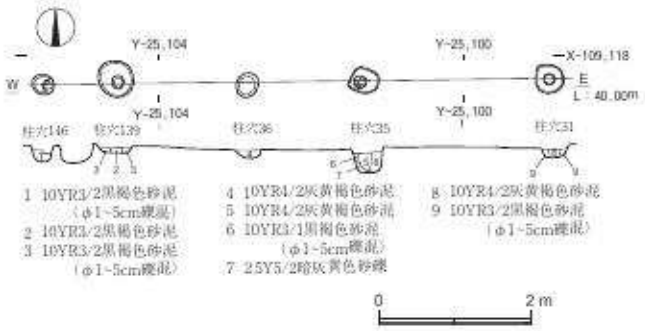


図15　柵８実測図（1/100）

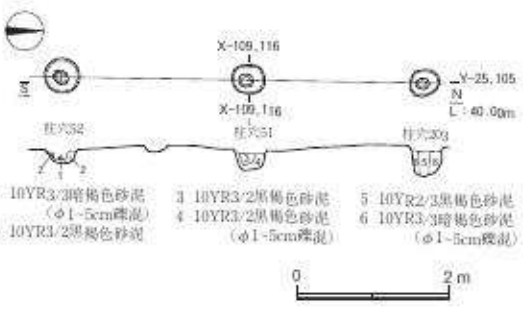


図16　柵11実測図（1/100）

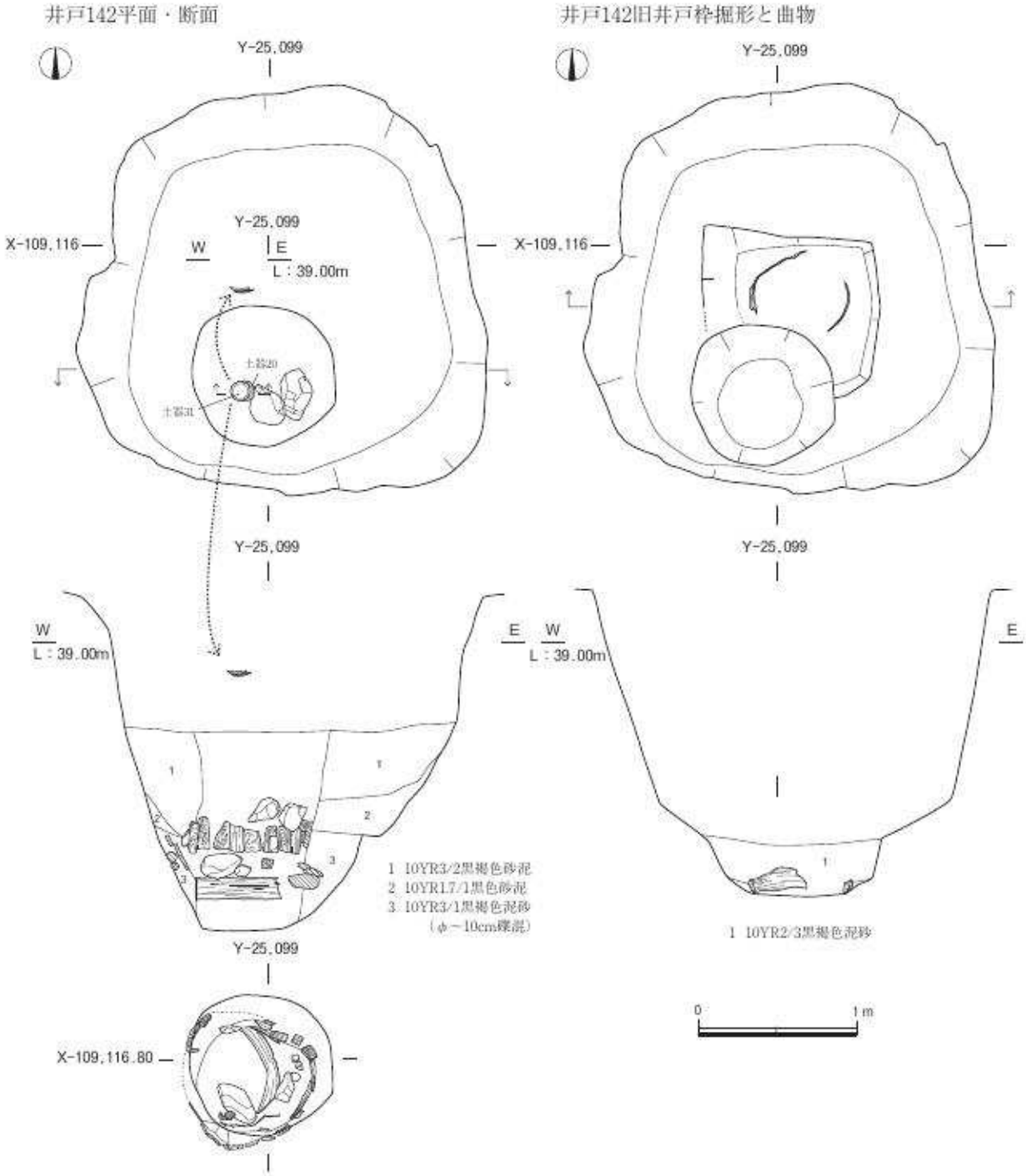


図17　井戸142実測図（1/40）

井戸142（図６・17・図版３の１～５）

調査区南東部に位置する。掘形はやや丸みの強い隅丸方形を呈し、南北長2.6m、東西長2.5m、深さ2.15mを測る。この井戸には新旧の２時期がある。１期は掘形中央部にやや方形の井戸枠掘形をもつ。井戸枠は抜き取られていたが、方形縦板組の井戸枠であった可能性がある。内径約0.6mの曲物が据えられていた。２期の井戸は掘形南部に位置する。井戸枠掘形で検出した楔状木製品は１枚が幅10cm、厚さ４cm、長さ16cmを測る。緩くアール状に加工されており、円形に据えた状態で検出した。当初は井戸枠と考えたが、個々の木を繋ぐ枘穴などの痕跡もなく簡単に剝がれ落ちることから、井戸枠を固定するための楔状木製品と判明した。また同様に大きく切断した須恵器甕片でも井戸枠の固定をしていた痕跡が確認できた。井戸枠本体は抜き取られていたが、楔状木製品の下には井戸枠を据えるためと考えられる石積みらしき痕跡があった。その内側に内径約0.6mの曲物が据えられていた。また、２期の井戸枠を据える時に１期の井戸底の泥土が流れ込まないように石で堰きとめた様子が確認できた。この井戸は廃絶する時に井戸枠内に石を入れて埋め、その上面に土師器皿を２枚重ねて埋納する。これは井戸廃絶に伴う祭祀のためのものではないかと推察できる。

土壙151（図６・図版１の２）

調査区中央部やや南寄りに位置する。南北長2.3m、東西長4.0m、深さ0.12mの不定形を呈する。井戸142に伴う水場関連の遺構かと考えられる。

柵４（図６・19・図版１の２）

調査区中央部やや南寄りに位置する。柵５、６とほぼ同一線上にある東西方向の柵列である。長さ9.3mにわたって検出した。柱間は3.0mを測る。径0.4～0.5mの掘形をもち、深さ0.15～0.35m、柱根跡は径0.2mを測る。東端は延びる可能性がある。

柵９（図６・20・図版１の２）

調査区南部に位置する。東西方向の柵列である。長さ9.2mにわたって検出した。柱間は1.6～2.6mを測る。径0.4～0.7mの掘形をもち、深さ0.2～0.3m、柱根跡は径0.2mを測る。東西両端は調査区外に延びる可能性がある。

柵10（図６・21・図版１の２）

調査区東壁沿いに位置する。南北方向の柵列である。長さ7.0mにわたって検出した。柱間は2.2mを測る。径0.25～0.35mの円形の掘形をもち、深さ0.15～0.2m、柱根跡は径0.15mを測る。

柱穴176（図６・22・図版１の２・４の５）

調査区北西部に位置する。径0.4～0.45mのほぼ円形の掘形をもち、深さ0.2m、柱根跡は径約0.2mを測る。柱根跡内から蛇の目高台の緑釉陶器底部が出土している。

柱穴185（図６・23・図版１の２・４の６）

調査区南東部に位置する。径0.4～0.45mのほぼ円形の掘形をもち、深さ0.1mを測る。削り出し高台の緑釉陶器底部や瓦片などが出土している。

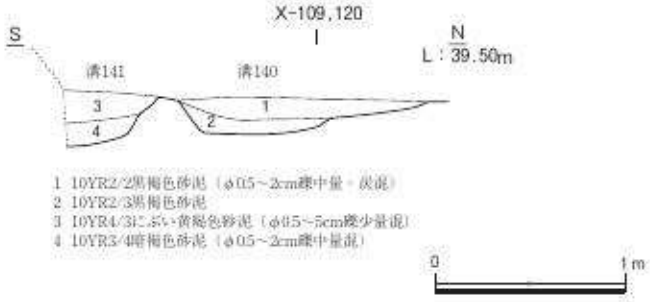


図18　溝140・141断面実測図（1/40）

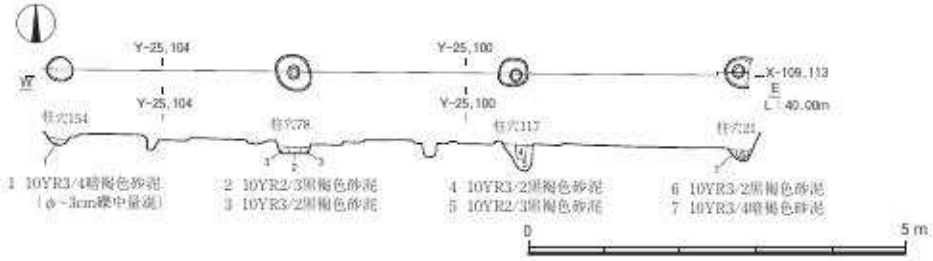


図19　柵4実測図（1/100）

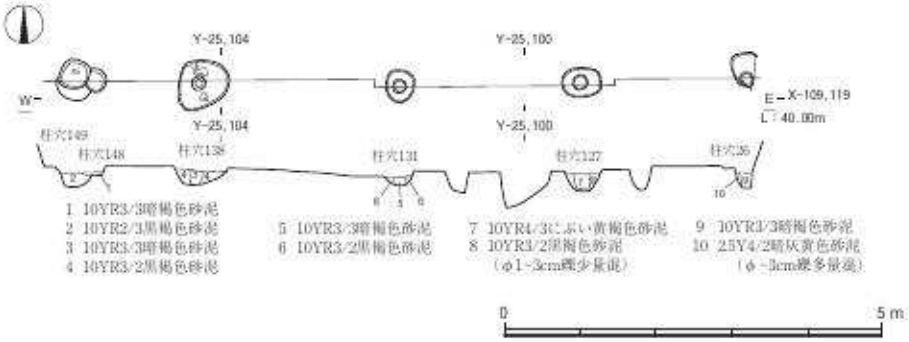


図20　柵9実測図（1/100）

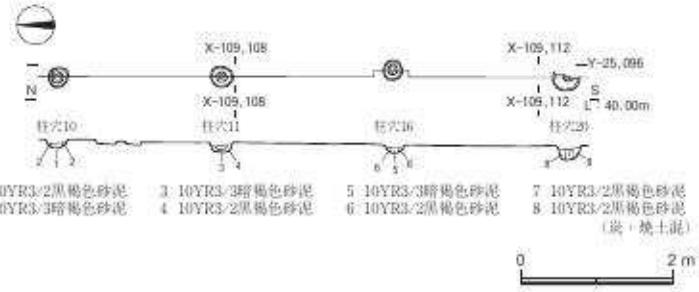


図21　柵10実測図（1/100）

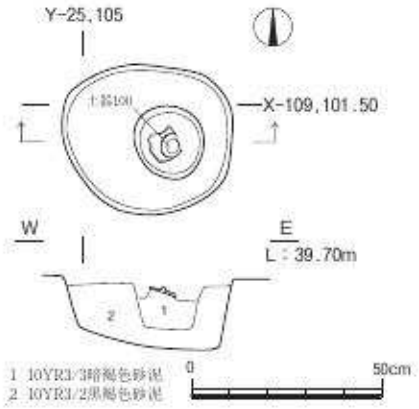


図22　柱穴176実測図（1/20）

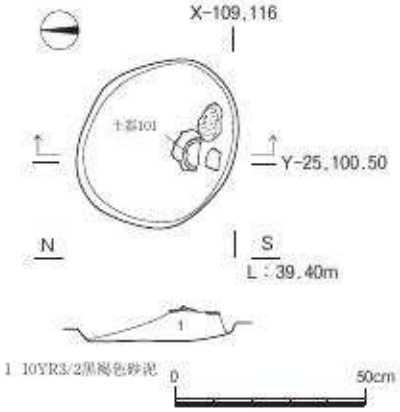


図23　柱穴185実測図（1/20）

土壙54・38・14・61（図６・図版１の２）

調査区北東部に位置する。南北方向に並ぶ土壙群である。径0.6～1.0m、深さ0.1～0.15mを測る。甕などを据えた可能性があるが、上層が削平され、出土遺物も少ないことから詳細は不明である。調査区中央部やや北寄りの土壙群も同様のものと考える。

Ⅲ　遺　　物

出土した遺物は整理箱に38箱ある。時代は平安時代中期のものが大半である。遺物の種類には土師器、須恵器、黒色土器、輸入陶磁器、瓦類、石製品、木製品などがある。以下主要な遺物について概述する。

なお、時代区分は平安京の土器編年[註3]をもとにおこなう。

土器・陶器類

建物３出土土器（図24）

須恵器蓋（１）がある。折り返しの受けをもつ。内面は平滑で墨が付着しており、硯に転用していたと考えられる。柱穴180出土。また、柱穴174からヘラ削りを施した土師器片が出土している。Ⅰ期中～新。

建物１出土土器（図24）

土師器椀Ａ（２）、皿Ａ（３、４）、杯Ａ（５）がある。２は口径12.2cmを測る。内外面ともに煤けており、体部外面に微かに削り痕が確認できる。柱穴169出土。３は口径14.0cm、器高2.4cmを測る。外面はヘラ削りを施す。４は口径16.2cmを測る。口縁端部は内側に肥厚し、外面はヘラ削りを施す。５は口径16.3cmを測る。口縁端部は内側に肥厚し、体部外面はヘラ削りを施す。３～５は柱穴６出土。

図24　建物３・１・柵１・建物２・溝141出土遺物実測図（1/4）

柵１出土土器（図24）

土師器椀Ａ（６）、皿Ａ（７）がある。６は口径13.2cm、器高4.2cmを測る。体部外面に微かにヘラ削り痕が確認できる。７は口径19.8cm、器高2.1cmを測る。口縁端部は内側に肥厚し、体部外面はヘラ削りを施す。いずれも柱穴12出土。

建物２出土土器（図24）

土師器杯Ａ（８）、須恵器蓋（９）がある。８は口径16.0cmを測る。口縁部は一段のナデにより外反し、口縁端部は小さな肥厚部をもつ。柱穴191出土。９は折り返しの受けをもつ。柱穴115出土。

溝141出土土器（図24）

青磁碗底部（10）がある。底径6.0cmを測る。底部は切り離し後不調整で、角を面取りする。釉はオリーブ色を呈する。底部内外面に重ね焼き痕が確認できる。越州窯系青磁である。

井戸142出土土器（図25・26・図版５・６）

１期の井戸からは小片の土器しか出土せず、図化できたのは２期の井戸のものである。土師器（11～49）、黒色土器（50～54）、須恵器（55～73）、緑釉陶器（74～89）、灰釉陶器（90～94）、青磁（95）がある。11～19、51、52、55、73、82、88は井戸枠内出土、それ以外は掘形から出土している。土師器には皿Ａ（12～16、19、20～29）、杯Ａ（11、17、18、30～40）、杯Ｂ（41）、甕（42～48）、羽釜（49）がある。皿Ａは口径14～19cm台、器高0.9～2.0cmを測る。杯Ａは口径11～16cm台、器高1.7～2.9cmを測る。40は杯の体部から底部である。内面に「□食」と読める墨書を施す。41は口径13.7cm、器高2.6cmを測る。底部に粗いナデで高台を貼り付ける。42は口径14.0cmを測り、体部外面に指押えの痕が顕著に残る。43は口径15.8cmを測り、内外面ともに煤が付着する。44は口径16.0cmを測り、口縁端部が内側に肥厚する。体部外面に粗い叩きのような痕跡が確認できる。45は口径18.6cmを測る。46は口径20.5cmを測り、口縁部外面は煤が付着する。47は口径26.6cmを測り、口縁部内面にハケ目痕が残る。48は口径28.5cmを測り、口縁端部が内側に肥厚する。49は口径24.3cmを測り、体部外面にハケ目痕が残る。黒色土器に

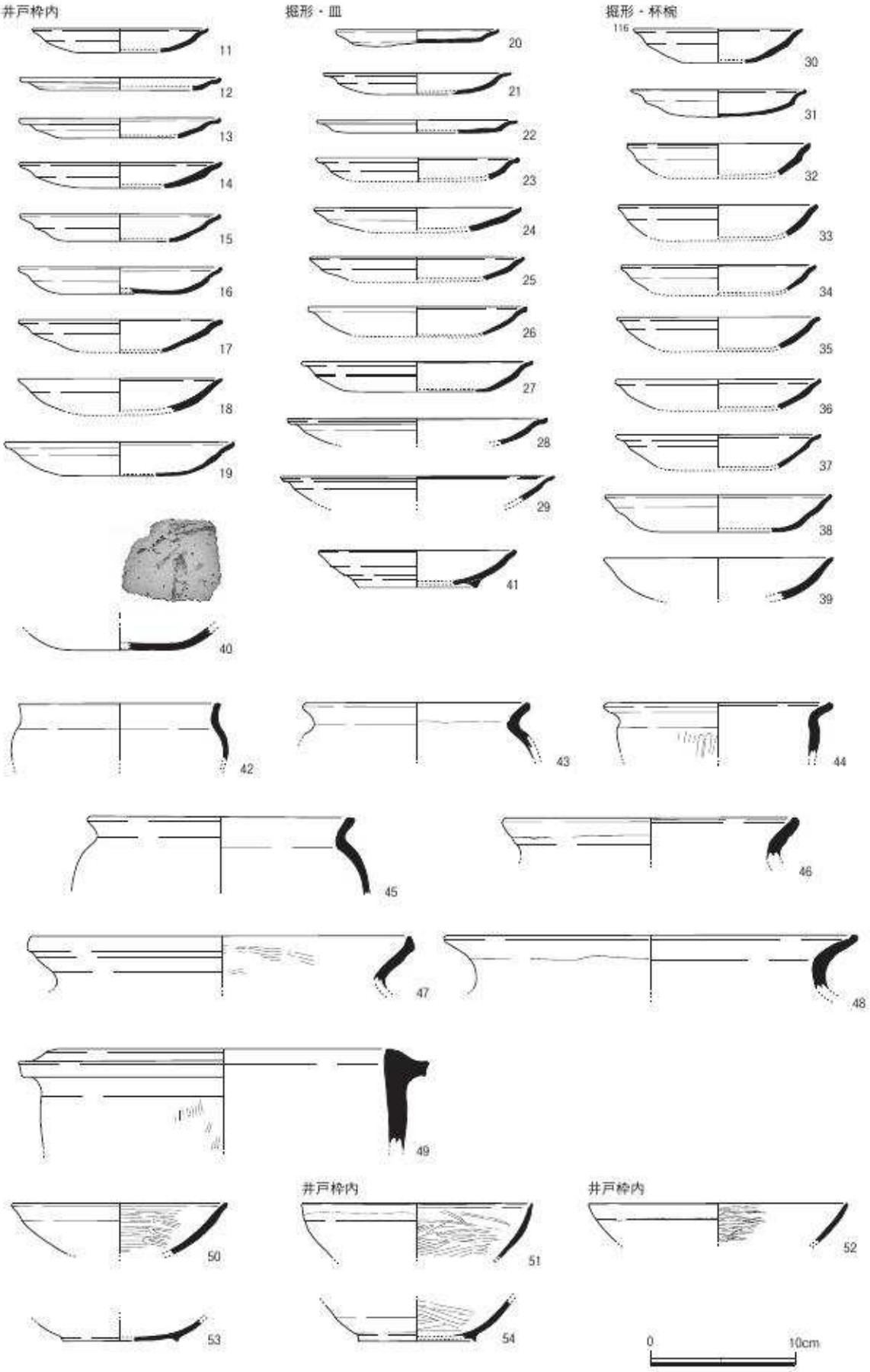


図25　井戸142出土遺物実測図１（1/4）

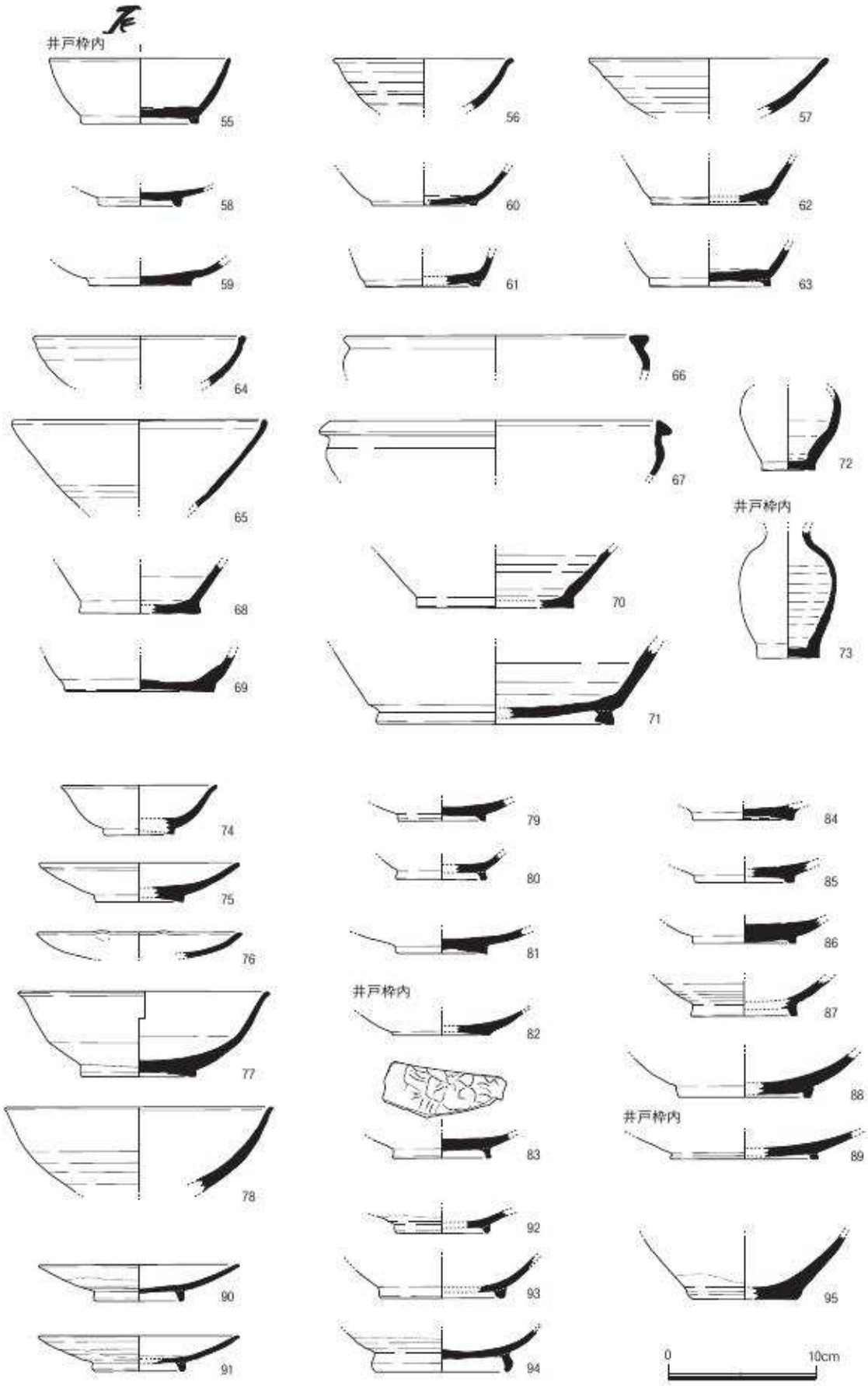


図26　井戸142出土遺物実測図２（1/4）

は椀B（50～54）がある。いずれもAタイプである。50は口径14.8cmを測り、口縁端部内面に一条の沈線が確認できる。内面は密に磨く。51は口径16.0cmを測り、口縁端部内面に一条の沈線が確認できる。内面は密に磨き、体部外面は指押えを施す。52は口径18.0cmを測り、内面は密に磨く。51、52は井戸枠内最下層から出土した。53、54は小さな三角の高台を貼り付ける。須恵器には杯B（55、60～63、71）、椀（56～59）、鉢（64～70）、小瓶（72、73）がある。55は口径12.3cm、器高4.5cmを測る。底部内面に「願」と考えられる墨書が確認できる。56は口径12.2cmを測り、体部外面は削りを施す。焼成がやや甘い。57は口径16.2cmを測り、体部下半は削りを施す。焼成がやや甘い。58は削り出し高台である。59は削って底部を平坦にしている。60～63は貼り付け高台である。63の胎土は1mm以下の砂粒を多く含む。64は口径14.4cmを測り、口縁端部は膨らみをもつ。65は口径17.4cmを測り。口縁端部はやや内傾する。66は口径20.6cm、67は口径22.0cmを測る。いずれも口縁下にくびれをもつ。68～70はいずれも底部外面に糸切り痕が残る。71は底部内面に墨が確認できる。72、73はいずれも底部外面に糸切り痕が残る。緑釉陶器には小椀（74）、皿（75、76）、椀（77～89）がある。74は口径10.6cm、器高3.4cmを測る。内外面を丁寧に磨き施釉する。硬質。75は口径13.6cm、器高2.7cmを測る。内外面を丁寧に磨き、底部外面を除き施釉する。硬質。76は輪花皿で口径14.0cmを測る。内外面を丁寧に磨く。硬質。77は口径17.2cm、器高5.9cmを測る。削り出しの蛇の目高台である。軟質。78は口径18.2cmを測る。内外面を丁寧に磨き、施釉する。軟質。79、85～88は削り出し高台である。87は硬質で、それ以外は軟質。80、83、89は貼り付け輪高台である。80はやや軟質、83、89は硬質である。83は見込みに陰刻花文を施す。81、82、84は削り出しの蛇の目高台である。81は硬質、82、84は軟質。灰釉陶器には皿（90～92）、椀（93、94）がある。90は口径13.7cm、器高2.5cm、91は口径13.8cm、器高2.5cmを測る。いずれも貼り付けの輪高台で、重ね焼き痕が確認できる。92～94はいずれも貼り付け輪高台である。94は高台の断面がやや三日月状を呈し、底部外面に墨書が確認できる。青磁には碗（95）がある。底部を削りで平坦に仕上げ、面取りを施す。内面に重ね焼き痕。

土壙151出土土器（図27・図版6）

土師器皿（96）、須恵器底部（97）、緑釉陶器皿（98）、越州窯系青磁底部（99）がある。96は口径14.0cm、器高1.4cmを測る。97はやや扁平状の高台を貼り付ける。98は口径11.2cm、器高2.7cmを測る。削り出し高台で、底部外面を除き施釉する。硬質。99は底部を削りで平坦に仕上げ、面取りを施す。底部内外面に重ね焼き痕。

柱穴176出土土器（図27）

緑釉陶器椀（100）がある。削り出しの蛇の目高台である。軟質。

柱穴185出土土器（図27）

緑釉陶器椀（101）がある。貼り付けの輪高台で、内外面を丁寧に磨き全面に施釉する。やや軟質。

瓦　類（図28・図版６）

複弁四葉蓮華文軒丸瓦（102）

井戸142出土。一本造りの瓦である。瓦当裏面の布目痕が筒部より連続する。胎土は２mm以下の砂粒を含み灰色を呈する。『平安京古瓦図録』[注4]内裏蘭林坊跡出土瓦（69）、『木村捷三郎収集古瓦図録』[注5]広隆寺出土瓦（763）と同文である。本調査地の北東にある右京二条三坊八町の洛陽総合高等学校の調査[注6]、本調査地北側の十六町の西側を通る恵止利小路西側溝にあたる溝[注7]においても同文の瓦が出土している。

均整唐草文軒平瓦（103）

溝140出土。瓦当顎部は横削り、平瓦部凹面と側面は縦削りを施す。胎土は1.5cm以下の小石を含み、灰白色を呈する。焼成はやや不良。『平安京古瓦図録』の西賀茂角社東群瓦窯跡出土瓦（335）と同文である。

石 製 品（図29・図版６）

石　鏃（104）

柱穴170出土。黒曜石製の石鏃である。長さ2.5cm、幅1.8cm、厚さ0.4cmを測る。片方の脚部が欠損している。全面に刃に向かって押圧剥離を施し薄く成形している。

木 製 品（図30・図版６）

楔状木製品（105、106）

井戸142から出土。井戸枠を支えるための楔と考えられる。材質は杉。105は長さ20.9cm、幅11.4cm、厚さ4.7cmを測る。106は長さ17.6cm、幅11.4cm、厚さ4.0cmを測る。いずれも両面を削り、先端が細くなるよう加工されている。緩くアールがついており、円形井戸枠の周囲に整然と配置したと推察できる。部分的に欠損などしていたが全部で13点出土した。

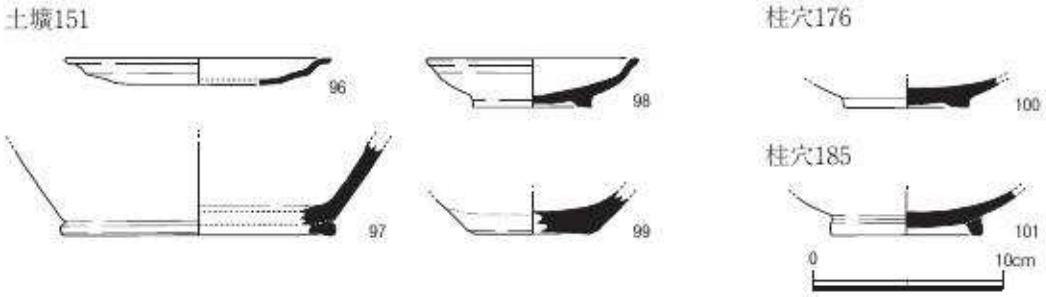


図27　土壙151・柱穴176・185出土遺物実測図（1/4）

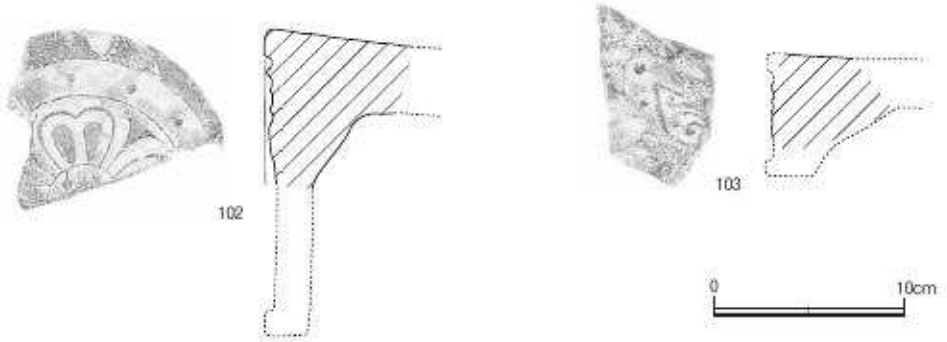


図28　軒瓦拓影・実測図（1/4）

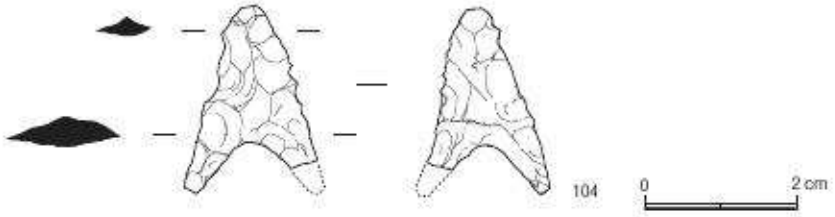


図29　石製品実測図（1/1）

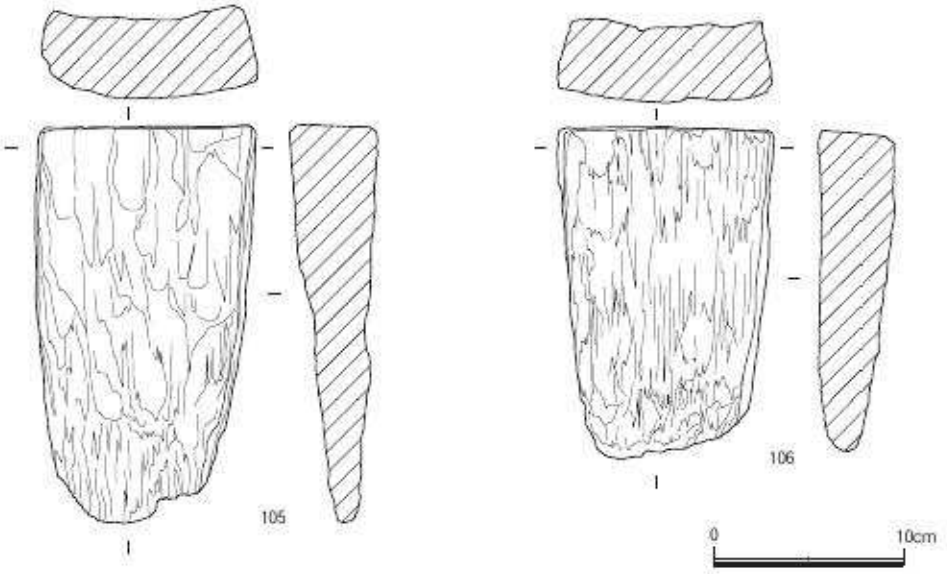


図30　木製品実測図（1/4）

Ⅳ　ま　と　め

今回の調査においては、平安時代前期から中期にかけての掘立柱建物、溝、柵列、井戸、土壙跡などを検出した。調査地は十五町の中央南端部にあたる東二行の北七～八門に相当し、十五町の南を通る大炊御門大路の北側溝とそのつくり替えの溝も確認できた。

掘立柱建物跡及び柵列、溝跡は複数の変遷時期があり、大きくⅠからⅢ期に大別できる。

Ⅰａ期　建物３・溝140

Ⅰｂ期　建物１・柵６・７・溝140

Ⅱ期　　柵１・３・溝140

Ⅲａ期　建物２・柵２・８・11・井戸142・溝140

Ⅲｂ期　柵４・９・10・井戸142・溝141

今回検出した最古期の建物３の柱穴180から出土した土器はⅠ期中から新に属する。また柱穴174からは外面にヘラ削りを施した土師器片が出土している。建物３の柱穴はいずれも方形の掘形を呈しており、９世紀前半のものと考える。また大炊御門大路の北側溝にあたる溝140もこの時期には成立していたと考える。これをⅠａ期とする。Ⅰｂ期にあたる建物１の柱穴６出土の土器はⅠ新からⅡ古に属する。建物１は南側に東西方向の柵６・７を伴う。柵７の柱穴34から外面にヘラ削りを施した椀Ａの体部が出土している。柵３の柱列は建物１の南側で平行するように検出した。検出できた遺物が少なく明確な時期を特定することはできないが、出土した土器片と柱列の並び方から建物１と大きな時期差はないと考える。柵１は建物１の南列の柱穴と一部重複している。建物１の柱列をつくり替えしたか、廃絶後につくった柵列ではないか。建物２は９世紀後半から10世紀前半にかけて成立したと考えられ、その北側に東西方向の柵列２を伴う。この頃に井戸142がつくられる。この井戸142は底部でつくり替えをしている。

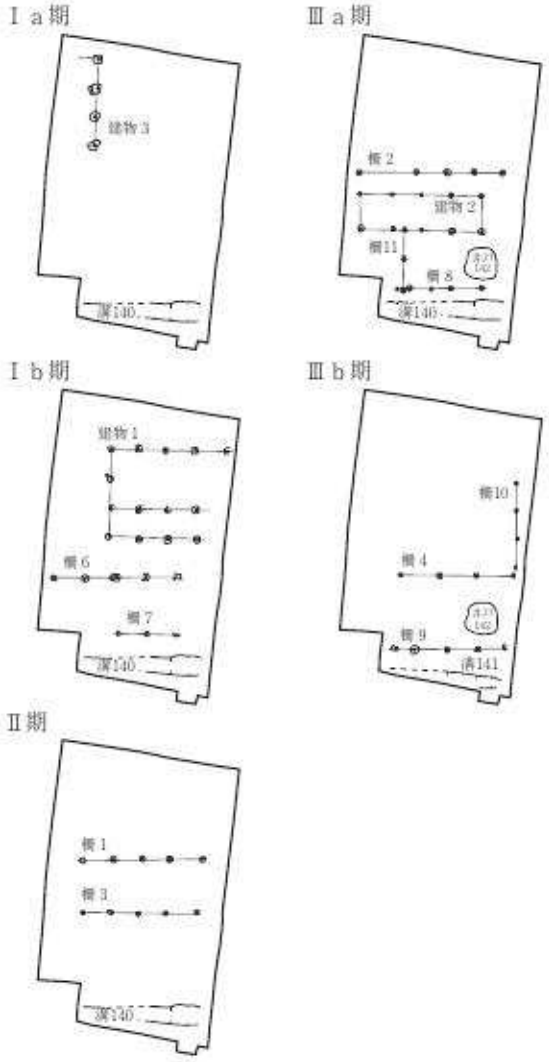


図31　遺構変遷図（1/400）

初めに中心に方形の井戸枠を据え使用する。その後、井戸枠は抜き取られ、別の場所で再利用されたと考える。再びこの井戸を使用する際、以前の曲物は残したままそのすぐ南側に新しい曲物と井戸枠を据え使用している。10世紀後半には井戸枠内を封じるように石を入れて埋め、その上面に土師器皿を２枚重ねて埋納する。井戸廃絶に伴う祭祀を行い井戸を廃棄したと考える。井戸と同じように大炊御門大路の北側溝も南側につくり替えられ、溝141として検出した。10世紀後半頃には建物も廃絶し、宅地から耕作地へとこの地は変遷し、耕作地の拡大に伴って大炊御門大路の北側溝は徐々に南に移動し、それに伴い溝北側の柵列も複数回つくり替えられたと考える。

以上、今回の調査では、平安時代前期から中期の建物跡や井戸跡、大炊御門大路の北側溝跡、建物や溝に伴う複数の柵列跡を検出した。井戸142から出土した複弁四葉蓮華文軒丸瓦（102）は、同文のものが八町の洛陽総合高等学校の調査、十六町の西側を通る恵止利小路西側溝にあたる溝からも出土している。これらの出土した瓦が月輪寺と関連するものである可能性がある。また、建物跡や複数の柵列跡、大炊御門大路の北側溝の変遷から、この地の宅地から耕作地へと変化する土地利用を確認することができた。

註１　『角川日本地名大辞典　26京都府』角川書店　1991年。
『日本歴史地名体系27　京都市の地名』平凡社　1979年。
『平安京提要』角川書店　1994年。

註２　『平安京発掘調査概報』京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所　1986年。
東　洋一『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-14　平安京右京二条三坊十五・十六町』（財）京都市埋蔵文化財研究所　2013年。
津々池惣一『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-6　平安京右京二条三坊十五町跡』（公財）京都市埋蔵文化財研究所　2013年。

註３　小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要　第３号』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1996年。

註４　『平安京古瓦図録』平安博物館編　1977年。

註５　『木村捷三郎収集古瓦図録』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1996年。

註６　水谷明子・家崎孝治『平安京右京二条三坊八町　洛陽総合高等学校校舎建て替えに伴う調査』古代文化調査会　2011年。

註７　註２『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-14　平安京右京二条三坊十五・十六町』と同じ。

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょううきょうにじょうさんぼうじゅうごちょう
書　　名	平安京右京二条三坊十五町
副 書 名	花園春日町の調査
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	水谷明子
編集機関	古代文化調査会
所 在 地	〒658-0032　神戸市東灘区向洋町中１丁目４番地125-1404
発行年月日	2016年３月31日

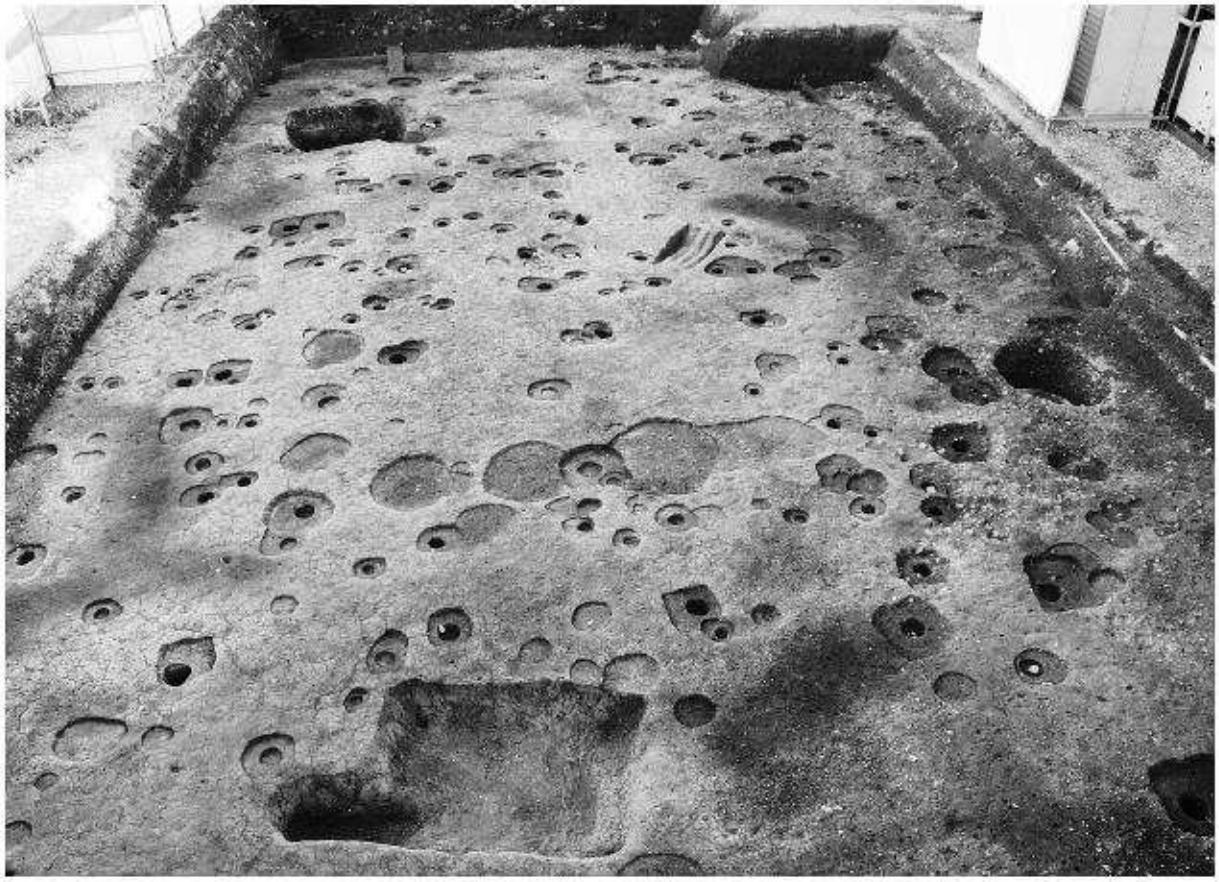
所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
平安京右京二条三坊十五町跡（へいあんきょううきょうにじょうさんぼうじゅうごちょうあと）	京都市右京区（きょうとし うきょうく）花園春日町（はなぞのかすがちょう）	26100	1	35度00分58秒	135度43分30秒	2015.11.02～2015.12.25	301㎡	マンション建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京右京二条三坊十五町跡	都城跡	平安時代	土壙、柱穴、掘立柱建物、溝、井戸	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、石製品、木製品	9～10世紀の建物遺構、大炊御門大路の北側溝

	Aランク点数（箱数）	内　　訳	Bランク（箱数）	Cランク（箱数）	出土箱数合計
点数及び箱数	106点（４箱）	土師器47点、須恵器22点、黒色土器５点、緑釉陶器19点、灰釉陶器５点、青磁３点、軒瓦２点、石製品１点、木製品２点	38箱	0	42箱

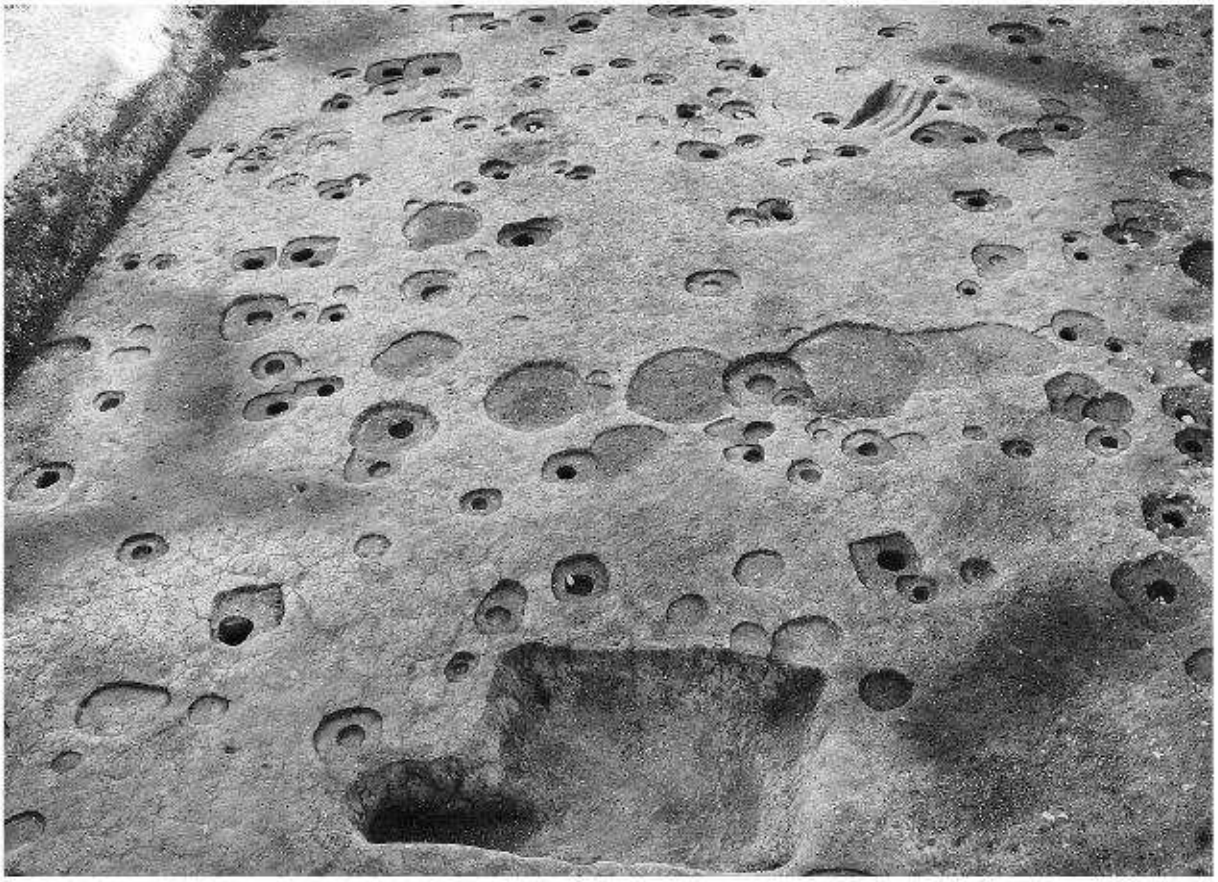
図　　版

1　調査区遠景（北から）



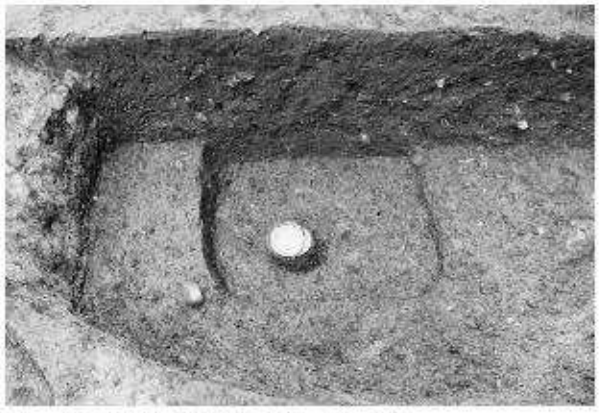
2　調査区全景（北から）

1　建物３（北東から）



2　建物１（北から）

1　井戸142井戸枠掘形検出状況（北から）



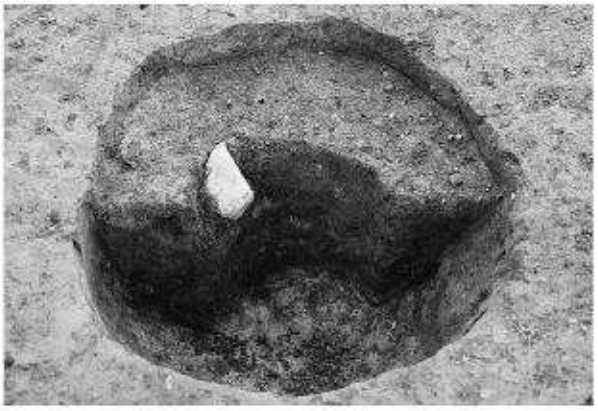
2　井戸142土器出土状況（南から）

3　井戸142断割（北から）

4　井戸142曲物検出状況（北から）

5　井戸142完掘・旧曲物検出状況（南から）

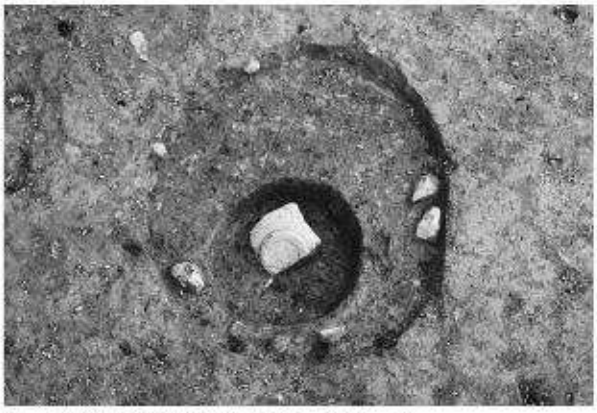
1　建物１　柱穴108（南から）



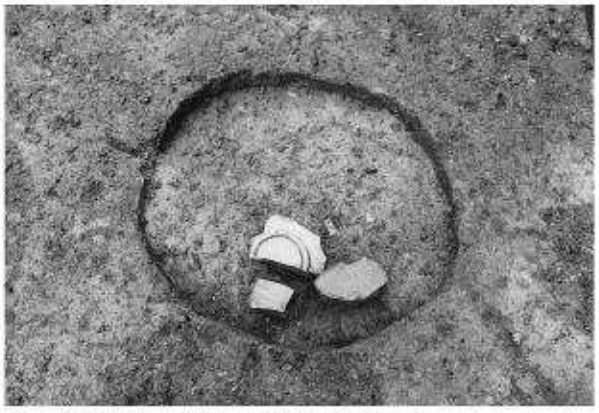
2　建物１　柱穴９断割（北から）

3　建物１　柱穴13断割（南から）

4　柵８　柱穴31断割（南から）



5　柱穴176土器出土状況（東から）



6　柱穴185土器出土状況（南から）

7　溝140・141（西から）

8　拡張区　溝141断面（西から）

20

31

55

40

72

45

73

49

77

井戸142出土遺物

79

99

81

102

83

103

90

94

104

98

105

井戸142（79・81・83・90・94・102・105）・土壙151（98・99）・溝140（103）・柱穴170（104）出土遺物

平安京右京二条三坊十五町

―花園春日町の調査―

発行日　2016年3月31日

編集
発行　古代文化調査会

住　所　〒658-0032　神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地125-1404
TEL　(078)857-6368

印　刷　真　陽　社
〒600-8475　京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL　(075)351-6034